

永島暢子と船木幾政

岩織政美さんと初めて会ったのは1982年の冬、永島暢子とその心からの友人である八木秋子の二人を知る石川すずさんを一緒に訪ねた時でしたから、ちょうど今から30年前になります。

その帰り、山手線恵比寿駅前で「ちょっと一杯呑みましょうか」と、呑み屋が暖簾を出す前に入れてもらい、深夜列車で帰るといって岩織さんと夜中まで延々と、愉しく、痛快に呑み続けました。

その後、『《永島暢子の生涯》婦人解放運動の先駆者 郷土出身者として一』、『批判を持つ愛の深さ～永島暢子著作集』が刊行されました。このたび、『永島暢子の周縁』の発行に際し、八木秋子の通信「あるはなく」や八木秋子著作集3巻の制作に関わったものとして心からお疲れさまと、申し上げたいと思います。

岩織さんから今回の出版に当たり何か書くように言われました。私はすでに、永島暢子と八木秋子については、『《永島暢子の生涯》』に書いた「重心を共有する女」があります1987。そして、永島暢子著作集の出版記念会でも「タイトルにまつわることや是川縄文遺跡の土器や土偶と私の発行していた小冊子『パシナ』との関わり」についても話しました1994。

そこで今回は、永島暢子の周縁にいた船木幾政について、書き留めたいと思います。「永島暢子がなくなるちょっと前、年下の青年を好きになったと八木秋子は書いていますが、おそらくその人物は船木幾政です」と、『永島暢子の生涯』の執筆を終える時期の岩織さんに伝えましたが(299p)、実はその際、確実な証拠はありませんでした。しかし、永島がその死を迎える直前に、純情に歳の若い人を愛していたという事実を伝えたい、わかっていることは状況証拠ではあるけれど、八木秋子もそのことを願っているに違いないと確信して岩織さんに言い切りました。

30年後、永島暢子と船木幾政とが恋愛関係にあったという直接の資料は見つかってはいません。しかし今回岩織さんからいただいたこの機会に、わたしの責任において、新しく見つかった資料を加えて、二人をむすびたいと思います。

まず、八木秋子の二つの文章を紹介します。

○八木秋子が語る永島の恋愛

永島さんも、私の内地の時代からの同志の人との恋愛問題もあつたりしたのですが、転向者のわたしたちはお互いさまで、そういう過去や現在のことにはお互いにふれないことにしようということ。

むすばれる恋だと思わない、八木さん、どうして永嶋さんのために忠告しないか、ってまわりの人がいうんです。永嶋さんが非常に純情に歳の若い人を愛しているから、いまのうちにか言ったほうがいいって。終わりは全うできなくたって、それはその時でいいじゃないか。わたしは口ばしを入れたくないし、私がかかっているということで、あの人をきゅうくつがらせたくないから、っていって何も言わなかった。そうしたら一方の人が転勤になって山奥へ移っていき、自然に終わってしまいました。昭和18年ごろの話。

『埋もれた女性アナキスト 高群逸枝と「婦人戦線」の人々』
「マルキスト永嶋暢子との思い出」より 1976年9月30日発行

○八木秋子が語る船木の恋愛

船木君は新京でずっと親しくしていました。彼は東邊道開発という特殊会社で労務管理の仕事をしていたうちに、自ら進んで東邊道の現場一通化地方に赴任し、その後も、終戦後も全然消息を知りません。通化地方は当時非常に大規模な開発建設事業が始められ、終戦のときには関東軍の首脳部がそこに逃げこんだので、相当な混乱があったものと案じられています。

彼が東邊道の現場へ転勤したことには、当時私たちの仲間、いわゆる保護観察下にあった転向組のあいだには、二つの想像が行はれました。最も興味のある仕事を選んだ、というのと、一つは、彼が、みずからの恋愛を清算しようとふみきったということです。これについてはまたお話しする機会もあるでしょう。

和佐田芳雄あて八木秋子の手紙より (1957(昭32)年7月12日)

昭和初期、永嶋暢子はマルキストとして労働組合運動に、八木秋子はアナキストとして農民運動にと、それぞれ別々の道を駆け抜けました。その時、八木と一緒に闘った同志の一人が和佐田芳雄であり、船木幾政でした。

船木は本名を「船木上(のぼる)」と言い(幾政は筆名)、鳥取の米子市の出身で1912年生まれですから永嶋の15歳年下となります。列島でのアナキズム出版活動で逮捕された後、満州にわたり、新京で八木らと交友を深めました。

この八木秋子の二つの発言を重ねると、恋愛の関係にあったのは、永嶋暢子と船木幾政の二人以外に思い当たる人物がおりません。生前の八木秋子に永嶋の恋人について確かめた際「それはほらっ、あんたも知っている」と喉まで名前が出かかっていたが無理でした、しかし、わたしは船木だと直感しました。

今回は、それに新たな資料を加えたいと思います。

船木は東邊道開発に勤めており、そこで労務管理の仕事をしていたと八木は和佐田への手紙に書いています。

「東邊道」とは日本でいう「東海道」と同様、当時の満州東南部一帯を指し、現在の吉林省東部、朝鮮民主主義人民共和国との国境地帯に相当する場所でした。

岩織さんから送られてきた「戦時下、旧満州における技術員・技術工養成」原正敏執筆 学習院大学東洋文化研究所発行 から引用すると、「東邊道開発株式会社は、1936年秋の満州国鉱産資源連合調査会の東邊道地方地下資源調査の結果、有望な鉄鉱資源ならびに石炭、石灰、耐火粘土等製鉄用資源の併存が明らかになり、満業鮎川総裁より「満州国」及関東軍当局に東邊道資源の総合的開発意見が提出され、1938年（昭13）9月に創立されたものである」といいます。

続いて「開発にともなう技術工の需要と急激なる増加」の必要性から「養成所の設置がはかられ、1939年春からその具体化が検討された」とありました。

永嶋が1939年夏ごろ二番目の仕事としてついた『鉱工満州』の「満州鉱工技術員協会」は「鉱工技術員・技術工の募集、養成、訓練、補給のため1938年12月に設立」されたものです。ですから、その資料と永嶋暢子の歩みを重ねてみますと、技術者を養成する目的の協会の『鉱工満州』に所属する永嶋とそれを労務管理する船木の関係がわかります。永嶋がその仕事の縁で船木と知り会うことは自然ですし、八木を加えた三人が、新京での思いがけない出会いに驚喜したことは間違いないでしょう。

わたしが国会図書館で見つけた『満州新聞』の船木の文章は、1941年（昭16）12月3日から3回にわたって労務管理者として書いています。

・能率問題—生産力高揚と鉱山工人

（船木幾政 東邊道開発会社勤務）

「吾々労務管理者は工人を繰り込んだ後の管理は技術家に任せてしまひ、労務管理の対象外視して居る弊がある」といい、労務管理者として、アメリカのテーラーシステムやソ連の計画経済を紹介し、生産力高揚をはかるために、ただただ精神論として鼓舞しても問題は解決せず、能率や労働環境の改善等、「科学的究明」への努力に努める必要があると主張しています。

ここで掲載された日付は1941年（昭16）12月3日、つまりアメリカとの戦争が始まる真珠湾攻撃の5日前です。その時点でアメリカとソ連の生産力について語っている点に注目したいと思います。アメリカの生産システムの合理性と日本の精神論の対比が生産現場から具体的に語られていました。その後、アメリカの圧倒的な物量攻勢により、日本が敗戦への道を進むことを見通していたと言えるでしょう。

ところで、東邊道と言えば、永嶋が書いた「満州のみやげ」(『輝く』1940年(昭15)5月17日発行—船木の文章が載ったおよそ一年半前)も思い出します。そこに「私は最近或雑誌の《東邊道雑感》を読んで強く心を打たれた」とあります。もちろんこれは東邊道の小さな村の報告記事ですが、同じ地域のことについて書かれていることや「満服を着て満州語で、農村を歩けば日本服と日本語で歩いては聞かれないやうな事までよく彼らは語るといふ。私達はさうした彼等の心理をじっくり考へてみたいと思ふ」と書く永嶋と、鉦山労働者の待遇向上や列島で農村運動に関わっていた船木が共有する世界とは一致しています。

最後に、古書店で見つけた一冊の本『東邊道』から彼女たちの周辺をたどってみます。

その本の帯には国務院弘報弘報処長武藤富男の「一読を薦む」があり、関東軍報道班長の長谷川宇一による「満州の実相を把め」があります。以下引用します。

「所謂大東亜共栄圏に於ける満州国の資源的地位は極めて重要である。特に地下資源は實際掘り出して始めて真価が知れるものであるが、何しろ優良な鉄と石炭とに飢えている日満の大きな、併しいまだ漠然とした期待が東邊道にかけられていることは、否めない実相である。

この一般には漠然とした期待を、可能な範囲ではっきりと示して呉れたのが、この『東邊道』である。この人が真剣に実地に東邊道を跋涉し、多角的に而も仔細に資料を蒐集研究して之を手際よく整理展開したのが本書である」

その本の内容は、東邊道の沿革から始まり、資源調査、鉦産資源の現況、農林産資源の概況、開発の歴史と状況」等々総合的な視野からの報告調査です。著者の森崎實は満州新聞社編集次長兼政経部長であり、そして、発行は真珠湾攻撃の年、1941年(昭16)1月28日発行でした。

つまり、船木が満州新聞に記事を寄せた1941年の『満州新聞』には、『東邊道』の著者である森崎が編集次長兼政経部長として、文化部部長には『轉向記』の著者山田清三郎がおり、その山田には永嶋がそれまで住んでいた大同倶楽部の部屋を貸しているのです。ここでも永嶋と船木はむすびつきます。あるいは船木の文章は、鉦山労働者の労働環境の改善要求等、いろんな思惑があつてのことだったかも知れないと、1941年の永嶋の周縁が見えてきました。

岩織さんは「船木と永嶋の恋愛は普通の浮ついたものではなく、<実践>に裏付けられた同志的感情に基づくものだったのではないのでしょうか」と、原さんの資料を送ってくださった際、お書きになっています。

2012年の暑い夏、8月はいつも戦争を際立たせます。

満州での混乱の 8 月を船木はどう過ごしたのでしょうか。

消息不明となった船木幾政（1945 年当時 33 歳）への追悼の意味を込め、そして永嶋暢子（1945 年当時 48 歳）の純情な想いを想像し、二人のきずなをむすびます。

2012 年 夏

相京範昭